

待つ人ブルースト

—『失われた時を求めて』における待つことの機能—

田 中 良*

L'attente dans "A la recherche du temps perdu

Ryo TANAKA

要 旨

ベケットが『ゴドーを待ちながら』で表現した通り、待つことは、十九世紀のジュリアン・ソレルやラスティニャックが抱いた野心とは全く別の、二十世紀の文学的テーマである。マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』では、この待つことがとりわけ重要なエピソードにおいて活用されている。本稿のテーマは、この小説に表れる様々な待つという行為あるいは状態を具体的に検証し、その機能と作者の意図を考察することにある。

第一に、待つことはブルースト的想像力にとっての磁場であった。確かに主人公は、ルーサンヴィルではその土地の女性の出現を求めて森をさまよひ、プーローニュの森ではスワン夫人を、パリの通りではゲルマント公爵夫人を待ち伏せしながらも、そのどれにも成功していない。しかし彼にとって重要なことは、その待ち伏せによる実際の接触より以上に、彼女達を待っている間での欲望と想像力の高揚であった。たとえステルマリア夫人との夕食の約束が直前にキャンセルされたとしても、彼はその時が来るのを待つ間に、約束していたプーローニュの森のレストランで彼女との官能的な夜を十分満喫していた。

第二に、待つことは変容の場であった。実際、主人公が何かを待っているとき、待たれているものは現れず、全く別の事態が生じている。シャンゼリゼ公園でのジルベルトとの再会、バルベックの海辺での少女達との出会い、シャルリュスの「変身」、サン・ルーの残酷さ、祖母の病氣、二度のレミニサンス、などに関わる重要な場面は全て、主人公が何か別のものを待っているときに展開している。これはブルーストの語り技法の問題であると同時に、偶然性を重んじるブルーストの思想の問題でもある。

要するに待つことは、方法論の上でも内容の上でも、『失われた時を求めて』にとって不可欠な要素であったといえる。

序 論

フランス文学史上、待つという非ドラマチックな行為あるいは状態を、人間の逃れられない一つの営みとして私たちの記憶に鮮明に刻みつけたのは、サミュエル・ベケットである。マーチン・エスリンは、『ゴドーを待ちながら』のテーマは「ゴドーではなく、待つという人間の条件の本質的で特徴的な一面としての待つという行為である」¹⁾と指摘している。待つことは、ラスティニャックやジュリアン・ソレルの抱いた十九世紀的野心からほど遠く、その意味では二十世紀の文学的テーマと言える。

マルセル・ブルーストはベケットに先立って、待つことには十分意識的であった。なぜなら『失われた時を求めて』²⁾では、待つことがいくつかの重要なエピソードに絡み、主人公が現実を理解してゆく上で、また作者がこの小説を書く上で不可欠な要素となっているからである。本稿のテーマは、こうした観点から『失われた時を求めて』における待つことの機能を検証することにある。論述の展開としては、第一章で主人公を待つ人と位置づけ、アルベルチーヌとの関係を分析し、第二章で想像力と欲望との関連で考察する。第三章では待つことに伴う現実の変容という別の観点に立ち、第四章ではその変容を作者の方法論と認識論の表れとして考える。

I. 待つ人と待たない人

ブルーストは確かに、特に若い頃は非活動的とは言い難い。リセ時代には友人たちと同人誌をつくり、病身や勉学という理由で免除されることもあった徴兵にも自ら志願し、中傷されれば決闘も辞さず、ドレフュス事件では再審要求のための署名運動まで先頭になって行っている。『ジャン・サントゥユ』にはそうした行動家であり、ときには暴力までふるう実生活者ブルーストの軌跡が多く残っている。ジャンは遊びに出るのを禁じる母に対して水差しを床に叩き付けるような暴力をふるい³⁾、ブルターニュでは友人と「十年来」といわれる嵐をわざわざ見に行き⁴⁾、ドレフュス裁判の傍聴にはサンドイッチと水筒に入ったコーヒーを持って出かけている⁵⁾。ところが『失われた時を求めて』では、そうした暴力、行動は消え去り、主人公はもっぱら非活動的になっている。その変貌には、作家の実生活と芸術という古来からの複雑な問題が横たわっていることは確かであるが、本稿ではその変貌を単純に、待たない人から待つ人への移行と考えたい。マーガレット・メインは「動と不動の二項対立は、作品を通してブルーストを引き付けてやまない」⁶⁾と指摘しているが、この動と不動の二項対立の変奏として、待つことと待たないことという二項対立を想定することも可能と考えるからである。そうすると『失われた時を求めて』の主人公の一つの側面が見えてくる。彼はその非活動性から判断して、明らかに待つ人に属している。

小説の冒頭から、彼は何かを待っている。眠りを待ち、夜中目覚めたときには夜明けを待ち、回想されたコンプレーでは母の夜の接吻を待っている。そして物語が始まると女性たちを待ち伏せる。コンプレーではその土地の女性の出現を期待してルーサンヴィルの森をさまよひ (I, p.154)、パリではプーローニュの森でスワン夫人を (I, pp.409-411)、後にはパリの通りでゲルマント公爵夫人を待ち伏せる (II, p.358)。またジルベルトに恋したときには彼女からの手紙を心待ちにし (I, p.578)、パリのアパートマンではアルベルチーヌがやって来た合図となる階段の光を待っている (III, p.126)。

それに引き換え、雨の日でもバルベックを自転車で疾走するアルベルチーヌ (IV, p.70)

の方は明らかに待たない人であった。そのことをはっきりと見抜いていたのは慧眼なフランソワーズである。主人公が「心の間歇」によって祖母の思い出に耽っていたとき、フランソワーズがアルベルチーナの来訪を告げる。彼女はアルベルチーナを待たせたまま、祖母の写真を見ながらひとしきり思い出にひたった後、ようやく来訪者のことを思い出し、「あんなに元気一杯ですから、もう帰ったかもしれません。待つことが嫌いな人ですから」（Ⅲ, p.173）と、アルベルチーナを待たない側の人間と断定する。さらにアルベルチーナはパリのアパートマンを出奔する直前、フランソワーズの「一時間待って下さい」という言葉に耳をかさず、朝主人公の寝ている間に出発する（Ⅲ, p.915）。このような恋人をパリのアパートマンに幽閉するということは、待たない人を待つ人に変えようとする試みに他ならず、最初から無理があり、不幸な結末は予見されていた。つまり主人公とアルベルチーナの愛と嫉妬のドラマは、待つ人と待たない人の対立として解釈することもできるのである。二度にわたるキスのエピソードは、その対立を浮き彫りにしている。一度目のキスは、バルベック・グランドホテルのアルベルチーナの部屋で試みられている（Ⅱ, pp.284-286）。誘ったのはアルベルチーナの方で、主人公は夕食後欣喜雀躍として彼女の部屋に忍ぶ。すると彼女は、白い下着を着てベッドで彼を待っている。これがそのときの状況であるが、これではアルベルチーナが待つ側で、主人公が待たない側になり、立場が逆である。結果的にこのときのキスは、直前にアルベルチーナが非常ベルを押したため不首尾に終わっているが、その原因は恐らくこの立場の逆転にある。一方、二度目のとき（Ⅱ, p.660）には、立場が本来のものに戻っている。待たない側のアルベルチーナが突然主人公のパリのアパートマンにやって来て、待つ側の主人公はベッドで横になっている。この状況で初めて主人公は、彼女にキスをすることができたのである。話者自身はその成功の理由を次のように推測している。「彼女がかつてあれほど厳しい顔をして拒絶したものを今あっさりとして許してくれたのは、バルベックのときと全く逆の場面を私たちが演じていたためであろうか。私が寝ていて彼女が立っていたので、彼女は暴力から身をかわし、自分の好きなように快楽を味わうことができたためであろうか」（Ⅱ, p.661）（下線部は筆者、以下同様）と。要するに話者はキスの成功の理由を、横臥と起立という姿勢の違いに求めているのだが、もう一つの重要な理由として待つ人と待たない人の対立があったことも確かであろう。

このように主人公は待つ人であり、待つ限りはジルベルトからの招待状のような「奇跡」（Ⅰ, p.491）も到来する。逆に言うと、そうした人間が待たないときには、最初のキスのときのような失敗に終わったり、場合によっては滑稽な場面を演じたり、致命的な事態を招いたりすることもあるということである。滑稽な場面と致命的な事態に関しては、主人公ではなく、カンプルメール若夫人とベルゴットによって各々演じられている。ルグランダンの妹はショパンの曲が演奏されていたとき、ピアノの上のローソクが紫檀に紙魚を付けそうになっているのに気づき、演奏中ローソクの受け皿を取りに行こうとするが、彼女が皿に触れようとした瞬間、演奏は終わる。「この若い女性の大胆な行為は、比較的ほほえましい印象を与えた」（Ⅰ, p.331）と注釈されているが、彼女はもう少し演奏の終わりを待てなかったばかりに、滑稽な場面を演じてしまっている。その結果彼女は、自らの音楽的無知と同時に、自分が待たない側の人間であることも明らかにした。ベルゴットももう少し病気の回復を待つべきであった。尿毒症に起因する軽い発作のため、医師から休息を勧められていたにも関わらず、彼はフェルメールの展覧会に出かけ、『デルフト風景』を前にして息絶える（Ⅲ, pp.692-693）。待たないことは死に至ることもあるという例である。そしてこれらのエピソードは、作者自身への警鐘とみなすことができる。

II. 想像力の飛翔

ではなぜ主人公は待つ人なのか。多くは作者の病弱な体質が投影された結果と考えられるが、そればかりでなくプルーストにおける想像力と欲望のあり方と深く関わっている。ミシェル・レモンは、プルーストの世界では「たいていやって来るのは待っていたものとは別物で、待っているものは、少なくとも待っているうちはやって来ない」と指摘しているが、確かにその通りであろう。ルーサンヴィルの森では土地の女性は出現せず、スワン夫人は主人公からの大仰な挨拶に対し軽く微笑むのみであり、ゲルマント公爵夫人の待ち伏せにいたっては母から直接止めるよう諭される(II, p.666)。同様に、少年の頃父親が約束した念願の北イタリア旅行は、その直前になって主人公の発熱によって中止され(I, p.386)、ステルマリア夫人とのプーローニュの森での夕食の約束も、その当日出かける間際に夫人の方から中止の申し入れが入る(II, p.686)。確かに「待っているものは、少なくとも待っているうちはやって来ない」が、プルーストにとって重要なことは、待っているものが来る来ないではなく、待つことそのものである。正確に言えば、待っている間での想像力の飛翔、欲望の高揚である。女性が現れるのを期待しながら、ルーサンヴィルの森をさまよっていたときには、「私の想像力は官能との接触で力を取り戻し、私の官能は、想像力の領域全体に広がっていたので、私の欲望はもはや際限がなかった」(I, p.154)、またパリの通りでゲルマント公爵夫人の待ち伏せを始めた頃は、「私は病気であることも、本を書くという勇気がまだ持てないことも、悲しいとは思わなくなっていた。大地はもっと住み心地の良い所のように、人生はやってみるともっとおもしろいもののように思えた」(II, p.359)というように、待っているときの心境が語られている。北イタリアの諸都市への有名な夢想はいうまでもなく、ステルマリア夫人とのランデ・ヴーの場合も、キャンセルされる前に主人公は想像力の中で霧に包まれたレストランで彼女との夕食を存分に楽しんでいる。繰り返すと、待っている間に想像力は現実をはるかに越え、欲望を現実以上に充足させているので、待っているものが来る来ないはすでに問題ではなくなっているのである。待つことの自己目的化とも言える。ところで、待つ人としての主人公の源泉には、レオニ叔母がいる。病床の叔母の楽しみは、日曜日毎に世間話のために来るユーラリの訪問である。「ユーラリを待つという快楽があまりに引き延ばされると、それは返って苦しみとなり、叔母は絶えず時間を見てはあくびをし、気を失いかけた。」(I, p.69)つまり叔母にとっては、ユーラリの訪問そのものより、彼女を待つことの方が「快楽」となっている。主人公も同様に待つことに「快楽」を感じていたに違いなく、その意味において想像力と欲望の人であると同時に、彼は待つ人なのである。

以上の通り、待っているものは待っているうちはやって来ないことは、この小説における一つの特徴と言えるが、例外的に待ち伏せが成功したり、待っている人がやって来たりすることもある。コンプレーの夜、母に対する待ち伏せが成功して、少年は母と一晚を過ごすことになる(I, pp.35-36)。またある冬の日のシャンゼリゼ公園では、雪のためジルベルトは来ないだろうと思ひ悲しみに沈んでいたとき、彼女が氷の上を滑るかのようにして彼のもとに現れる(I, p.398)。しかしそうした例外的な成功や出現は、主人公の欲望を充足させるためではなく、待つ者の不安を救済することを目的としている。待つことは必ずしも想像力の飛翔を意味するわけではなく、それは同時に不安でもある。「待つことを特徴づけている羅針盤の方向喪失」(III, p.135)という表現でその不安をプルーストは表しているが、ジルベルトと母はその不安を払拭してくれたのである。こうして主人公は、しばしば待つ不安から救済されているが、その点で彼は幸福であった。一方、彼のように救済されなかった不幸な人もいた。か

つての大女優ラ・ベルマである（IV, pp.572-576）。彼女は娘夫婦のためにティー・パーティを開くが、同時刻にゲルマント大公妃邸でラシェルを招いてのマチネが開かれているためもあって、誰もやって来ない。何も知らずにやって来た一人の青年は早々に引き上げ、娘夫婦までもこっそりと大公妃邸に赴く。かつての大女優は、死の床で娘の到来を待ちわびながら死んでいったゴリオ爺さんのように、救済されないままただ一人残される。

III. 変 容

これまで話題にしてきたのは主に、待っているものが待っている本人にとって欲望の対象と同一の場合、例えば恋人を待っているときのような場合である。その場合、待つことは前述の通り、ブルーストの想像力と欲望の力学の一環として理解できる。従ってこの場合、待つことは『失われた時を求めて』において特別な働きをしているわけではない。それに対し、待っているものが待っている本人にとって欲望の対象外るとき、例えば列車の修理を待っているようなときの方が、待つことはより特殊な機能を発揮している。その機能とは、端的に言えば、待つことを通しての現実の変容である。『ソドムとゴモラ』第二部の冒頭、ゲルマント大公妃邸の夜会に行くにはそれほど急ぐこともなかったのに、主人公は所在無げに外にいた（III, p.34）。待機状態にあったと言える。そのとき夏の夜九時の日差しをうけて、広場のオペリスクは「ピンクのヌガー」のように、月は「繊細に剝かれた一切れのオレンジ」のように変容する。このような変容、つまり欲望を離れて何気なく何かを待っているとき、突然予期せぬ事態が生じ、それまでとは違った現実が姿を現す、ということが『失われた時を求めて』ではしばしば起こる。では何が変容するのか。それは、第一に出会いに伴う新たな人間関係であり、第二にそれまで主人公の目には見えていなかった現実であり、第三にレミニサンスを契機とする現在と過去の関係である。以下、順を追って考察する。

最初に、出会いに伴う人間関係の変容についてであるが、『失われた時を求めて』における出会いについては、これまで様々な意見が述べられている。例えば、ガエタン・ピコンは「登場人物は紹介されるのではなく私たちの前に出現する」⁸⁾と述べて、出会いの偶然性、不意さを強調し、ジャン・ルッセは「まず想像し、次に出会う」⁹⁾として出会う前の想像力に力点をおく。大枠としては、これから述べる出会いも偶然性の問題に還元できるが、ここでの焦点は待つことにある。この小説では、何かを待っているときに不意に主人公と登場人物あるいは登場人物同士の出会いが生じ、それ以降の物語を大きく左右することがある。それが人間関係の変容の意味である。重要なのは三つ、すなわちシャンゼリゼ公園でのジルベルトとの二度目の出会い、バルベックの海辺での少女たちとの出会い、それにドンシエール駅でのシャルリュスとモレルとの遭遇である。

ジルベルトとは最初、コンプレーでの散歩の途中で主人公は出会っているが、そのときはそれ以上発展せず、彼女との交際が始まるのは二度目のシャンゼリゼ公園での出会い以降である。北イタリア旅行が発熱のため中止されたので、慰安をかねて主人公はフランソワーズに伴われてシャンゼリゼ公園を散歩することになる。しかし彼にとっては「この公園の中のものは何一つ、私の夢に結び付かなかった。」（I, p.386）そんなある日の公園で、「彼女（フランソワーズ）は、月桂樹のしげみを背にした椅子のところへ手荷物を取りに戻った。私は彼女を待ちながら広い芝生を踏みつけながら歩いていた。短くてみすばらしく、太陽の光で黄ばんだ芝生だった。」（I, p.387）そのとき一人の少女がジルベルトの名を呼びながら、彼女に別

れの言葉をかけているのを聞くのである。つまり彼は何気なくフランソワーズが戻るのを待っていたとき、偶然彼女との二度目の出会いを果たしている。

バルベックの海辺で、主人公が初めてアルベルチヌを含む少女たちのグループを見かけたのは、彼女たちがその海辺を散歩しているときだが、そのときも彼は待っていた。「グランド・ホテルの前で一人で祖母のところに戻る時間を待っていたとき、奇妙な斑点が動いている堤防のほとんど端のところで、五、六人の少女が歩んでいるのを私は見た」(II, p.146)と説明されている。ルーサンヴィルの森であれば待ち望みながら実現されなかった土地の女性たちとの出会いが、バルベックではただ時間待ちをしているだけであつてなくも実現されているのである。

駅は出会いと別れのための感傷的な場所として、古くから小説に映画によく利用されているが、『失われた時を求めて』では列車の発着を待つ間での不意の出会いの場として現れる。それが最も有効に機能しているのは、ドンシエールの駅でのシャルリュスとモレルの出会いの場合である(III, pp.253-257)。主人公はラスプリエールでのヴェルデュラン夫人主催の水曜会に参加するため、アルベルチヌとバルベックからローカル線に乗るが、途中サン・ルーと落ち合うためドンシエールで下車し、そこで一時間の時間待ちをしていた。その待ち時間の間に彼は、軍楽隊に所属しているモレルに出会う。モレルはかつての主人公の叔父の従僕の息子であるから、正確には再会である。二人の関係はそれ以上進展することはないので、この再会自体はそれほど重要ではないが、その直後のもう一つの重要な出会いのための伏線となっている。それがシャルリュスとモレルの出会いであり、その出会いはシャルリュスのその後の人生を大きく変えるだけに運命的と言える。シャルリュスはこの同じ駅で偶然、主人公たちとは逆方向のバリ行きの列車を待っていた。しかしモレルという彼の性的欲望を刺激する青年に出会ってしまったため、結局バリ行きには乗らず、その結果彼はその後社交界での失寵の道をたどることになる。時間待ちの結果、彼の人生は大きく変容したのである。

その他この小説における駅での出会いといえば、パリ近郊の駅での、ラシェルと彼女の同僚の娼婦たちとの出会いがあり(II A, 105)、それをきっかけに、サン・ルーは恋人の裏の生活に疑惑を抱き始めるが、彼女たちの出会いは駅が舞台ではあっても、待つことのテーマからは外れている。なぜなら、「私たちが美しい果樹園を去って、パリに帰るために汽車に乗ろうとしていたとき」、これがそのときの状況であり、列車を待つための場所ではなく、列車に乗るための場所としての駅が舞台になっているからである。さらに駅での出会いといえば、最初のバルベック旅行の途中、山間の小さな駅で見かけた牛乳売りの少女(I, p.16)思い出させるが、それはエピソードの域を越えていず、人間関係を変容させるに至っていない。

最後に待つことと出会いに関して補足しておけば、雨宿りの場合を挙げることもできる。『ジャン・サントゥユ』の作家Cは、燈台守の家で雨が止むのを待つ間にそこの主人と知合いになっている¹⁰⁾。しかし『失われた時を求めて』ではコンブレー時代、主人公はルーサンヴィルの森の木立の下やサン＝タンドレ＝デ＝ジャンの寺院の正面玄関で雨宿りしているが(I, p.149)、当時同じ森で遊んでいたというジルベルトたちのグループ(IV, p.269)をも含め、誰とも出会うことはなかった。雪による足止めではドンシエールのレストランでのエロチックな体験が語られているが(II, p.690)、それもエピソードの域を出ていない。

第二に、それまで主人公の目には見えていなかった現実が、待つことを契機に変容し、その実態が暴露される場合がある。特に性に関わる暴露では、次の三つの場合において待つことは極めて重要な役割を果たしている。

一つはモンジュールヴァンでの覗きの場合（I, pp.157-163）である。常識的に考えれば、主人公は以前訪問した経験から意図的にヴァントゥユ家のすぐそばの斜面に潜み、娘の帰りを窺っていたとなるが、話者はそのようには説明していない。話者によると、「とても暑い日だった。両親は一日中留守にするので、私にはいくら遅く帰っても良いと言っていた。そこで私は、モンジュールヴァンの沼に映る瓦屋根の反射をもう一度見たくて、その沼まで行き、斜面のしげみの中の木陰で横になるうちに眠ってしまった。」そして目覚めたときには辺りは暗くなっていて、立ち上がろうとしたとき帰宅したヴァントゥユ嬢を見た、となる。要するに主人公がヴァントゥユと女友達との同性愛とサディズムの場面を目撃したのは、偶然夕暮れまでの時間待ちをしているときだったということである。

シャルリュスとジュピアンとの遭遇を目撃したときも主人公は待っていた。彼らを待っていたのではなく、自分がゲルマント大公夫人の夜会に招待されているかどうか尋ねるために、アパルトマンの階段に座ってゲルマント公爵夫妻の帰宅を待っていたのである。そのとき偶然二人の運命的な出会いを目撃している（III, pp.3-4）。その後、主人公は二人の後をつけジュピアンの店の隣の仮店舗から盗み聞きすることによって、それまで主人公の目には見えなかったシャルリュスの性的倒錯という本性を知ることになる。

アルベルチヌの性的傾向に対する主人公の疑惑は、コータル医師のある指摘に発しているが（III, pp.190-191）、そのときにも待つことは不可欠な要素となっている。周知の通り、アンカルヴィルという町のカジノで、医師と一緒に踊っているアルベルチヌとアンドレを見ながら、彼女たちが胸を触れ合わせることで快楽に耽けていると主人公に指摘する。この指摘からアルベルチヌとの関係は複雑化してゆくが、ここで見落としてはならないのは彼がアンカルヴィルの町に降りた理由が列車の故障にある点である。列車が故障し、その修理を待っている間にコータル医師に出会い、誘われるままに入ったカジノで主人公は彼女たちに出会っている。話者はその偶然性を次のように説明している。「もし私が列車の故障のためアンカルヴィルに止められていなかったら、私は彼女たちに出会わなかっただろう」と。当時はしばしば列車の故障があったらしく、ゲルマント公爵夫人のパーティのときにも一人脱線事故で一時間遅れで到着した招待客がいた（II, p.773）。従ってこの説明は一見ごく自然に聞こえるが、その説明の前文で、「アルベルチヌと女友だちたちはその日、アンカルヴィルのカジノに私を連れて行こうとしていた」と述べられていて、必ずしもそこでの出会いが偶然であるとは限らないことがわかる。

何かを待っている間に暴露されるのは性的なことだけに限らない。それまで心優しい親友だと思っていたサン・ルーの残酷さ、またそれまで主人公がそれほど重いとは思っていなかった祖母の病気、それらが主人公の目の前で明らかにされるのも待つことを通してである。サン・ルーの残酷さが発覚したのは、パリのアパルトマンの階段の上で主人公がサン・ルーの帰りを待っていたときのことである。それに先立ち、主人公は失踪したアルベルチヌの消息を知るため、ボンタン夫人への訪問をサン・ルーに依頼していた。その友人の帰りを待ちわび、主人公は部屋を出て階段の上で待っていた。そして「サン・ルーを階段で待っていたとき、次のような言葉が聞こえていた。」（IV, p.53）それは、気に入らない同僚を解雇させる卑劣な方法を、ある従僕に伝授しているサン・ルーの声であり、そのとき初めて主人公は、親友の優しさの裏に隠された残酷さを知る。祖母の病気の重さが発覚したときも待つことは関連していた。祖母の病気を神経過敏症と判断する医師デュ・プールボンの勧めに従い、祖母は主人公とシャンゼリゼ公園を散歩していたが、その公園のトイレで発作を起こす（III, pp.605-608）。主人公の方は、トイレの外でしばらく待った後、出てきた祖母を見て初めて事の重大さに気づく。

第三に、数あるレミニサンスの内、二つ場面は待つことに関連している。その一つはシャンゼリゼ公園のトイレでのもので、もう一つはゲルマント大公妃邸の書斎でのものである。前者では、主人公はトイレに入ったフランソワーズを外で待っていた。「私はその入口でフランソワーズを待っていたが、その入口の湿って古い壁は、閉ざされた場所の持つひんやりとした匂いを発している (...)、その匂いが私を楽しくさせた。」(I, p.483) 公園からの帰り、このトイレの壁の匂いがコンプレーのアドルフ叔父の小部屋から放たれていた匂いと同じであることに主人公は気づく。

ところでこのシャンゼリゼ公園のトイレは、前述した祖母の病気が発覚する舞台となったトイレと同一のものである。祖母のとき話者ははっきりとそのトイレを「かつてフランソワーズを待っていた、緑の柵のついた小さな小屋」と断わっている。その意味で『失われた時を求めて』におけるこのシャンゼリゼ公園のトイレは、決して主人公が用を足すための日常的な場所ではなく、後述のゲルマント大公妃邸の書斎と並んで、待つことを契機に変容のドラマが展開する極めて特権的な場所と言える。

ゲルマント大公妃邸でのレミニサンス(IV, pp.445-466)は、次のように要約できる。主人公は最初中庭で、不揃いに敷かれた敷石を踏んだ感触から無意識的にヴェネチアを想起し、次に邸内に入るとすでに演奏は始まっているということで、演奏が終わるまで待つように階上の書斎に案内される。そこで彼は、スプーンが皿に当たる音からかつて汽車の停車中に聞こえてきた鉄道員のハンマーの音を、こわばったナプキンの感触からバルベック到着の第一日目を、さらに水道管の音からバルベック沖の遊覧船の音を、というように立て続けに過去を無意識的に思い出す。さらに書架からジョルジュ・サンドの『フランソワ・ル・シャンピ』を取り出すと、「その途端、私の中に一人の少年が立ち上がり、私にとって代わる。」(IV, p.464) この書斎の重要性に関してはこれまでも指摘されてはいるが¹¹⁾、それに付け加えておかなければならないのは、待つ場所としての書斎の働きである。書斎で演奏が終わるのを待つ間に、数々のレミニサンスを体験したということである。

トイレの外でフランソワーズを待っているとき、また書斎で演奏の終わり待っているとき、不意に現在と過去が覆り、その瞬間現実に変容し新たな姿を見せるのである。

IV. 小説作法あるいは認識論

ではなぜこのように『失われた時を求めて』では、何かを待っているとき変容が起こるのか。もちろん一つには、方法論の問題として、作者の小説作法が考えられる。主人公は自主的に待っていたのではなく、意図的に作者によって待たされていたという考え方である。その場合、待つこと自体には深い意味はなく、それに続く変容を導くための導入部として利用されている。不連続な断片群、エピソードを連結するための装置のような役目をしていたとも言える。例えば主人公はバルベックの海辺で時間待ちをしたり、アパルトマンの階段でゲルマント公爵夫妻の帰宅を待ったり、ゲルマント大公妃邸の書斎では演奏の終わるのを待ったりしているが、それらはすべてそれに続く、少女たちとの出会い、シャルリュスとジュピアンとの遭遇、そしてレミニサンスを導くための作者の語りの技法と考えられるのである。

そのことを端的に表している一つの場面がある。バルベックでシャルリュス男爵がスパイか何かのように主人公を窺っている場面である(II, pp.110-112)。この場面の前段で、シャルリュス登場の導入部として、叔父シャルリュスが言い寄ってきた男色者を叩きのめしたエピソード

ソードをサン・ルーが主人公に語っているが、これに続く「スパイ」の場面は段落を改め、「ロベールが叔父を待っている間に彼について語ってくれた日の翌朝」という前置きで始まっている。サン・ルーがバルベックに滞在している理由も「ヴィルパリジ夫人のところで二日間を過ごしにくる叔父を待つ」(II, p.107)ためである。次にその翌朝、主人公は「狂人かスパイ」のような不審な人物に見つめられているのを感じる。「彼は私に大胆かつ慎重、迅速かつ深遠な最後の流し目を送ってきた。」その男は手帳を取り出し、ポスターの劇の題を写すふりをし、ときおり腕時計を見ては、待っている人がなかなかやってくる身振りをする。しかしそれは「もう十分待ったと人に見せる不機嫌な身振りであるが、本当に待っているときには決してしない身振り」であった。その後、主人公は祖母と落ち合い、散歩する。そして「一時間後、ほんの少しの間ホテルに戻った彼女(祖母)をホテルの前で待っていたとき、私はヴィルパリジ夫人、ロベール・ドゥ・サン・ルー、それにカジノの前で執拗に私を見つめていた見知らぬ男の三人と一緒に外出する」のに出会い、ヴィルパリジ夫人からその男を「ゲルマント男爵」として紹介される。以上がシャルリュス＝スパイの場面の一連の流れであるが、この流れにおいて待つことは、まずサン・ルーのバルベックでの存在理由となり、次に彼の語り、翌日のシャルリュスとの出会い、さらにヴィルパリジ夫人による紹介までを接続しているのである。

一方、こうした小説作法自体、ブルーストの世界観ないしは哲学の根幹をなしている偶然性への信頼から出ていて、それがまた待つことへの信頼に結び付いていることも忘れてならない。つまり待つことは技法上だけでなく、ブルーストの思想に関わる問題でもある。何かを待っているときに別の思わぬ変容が生じるということは、偶然性の証に他ならない。そしてその偶然性は、同時に作者の無作意性の表明にもなっている。前述した様々な出会い、暴露、レミニサンス体験などは偶然であり、それ故ブルーストにとってそうした変容は真実味を持つのである。ただし、モンジューヴァンでの覗きの場面に限っては、どれほど偶然性を装い、無作意性を強調しようとも、それが逆に覗きという暗い欲望を浮き彫りにするという結果になっている。なぜならそのとき主人公は、シャルリュスがカジノの前で「本当に人を待っているときには決してしないような身振り」をしていたように、主人公も夕暮れまでの時間待ちを、普通の人なら決してしないような、他人の家の二階のすぐ側でしていたのだから。しかしいずれにせよ、ブルーストにとって待つことは、単に技法上の問題だけでなく、偶然性という彼の思想に関わる問題でもあった。ジル・ドゥルーズは「思考されるものの必要性を保証するものは、出会いの偶然性である」¹⁰⁾と述べているが、その表現を借りれば、ある変容を描写する必然性を保証するものは、何か別のものを待っているという偶然性なのである。

さらにブルーストにとっては待つということは、精神的な緊張が解かれた空白状態、心理的にニュートラルな状態を意味し、その状態のとき彼の感性はより過敏に反応したとも考えられる。ゲルマント大公妃邸の書斎で様々なレミニサンス体験は、演奏が終わるのを待つという精神的な空白状態を抜きにしては考え難い。これはブルーストの一つの認識方法である。プチット・マドレーヌの体験の時、最初の快楽を再び味わおうとするがうまくゆかない。「そこで逆に、精神に禁じていた気分転換を与え、他のことを考え、そしてすばらしい試みをもう一度やってみた。そして二度目、私は精神の前を空白にし、最初の一口めの味と直面した。すると私の中で何かが震えるのを感じた」(I, p.45)と語られているが、このときの「他のことを考え」、「精神の前を空白にして」という方法は、ブルーストの認識の一つのあり方を端的に示している。つまり何かを待つという状態は、ここでの精神的な空白状態に等しく、ブルーストの一つの認識方法となっている。

結 び

『失われた時を求めて』における待つことの機能について言及した研究者は少ないが、その中の一人マルセル・ミュラーはその機能を「凝視」(contemplation)の中にみている¹³⁾。ゲルマント公爵夫妻の帰りを待っているとき目撃されたシャルリュスとジュピアンの出会い、列車の修理を待つ間に見たアルベルチヌとアンドレのエロティックなダンス、夕食を待つ間に映写された幻燈など、本稿でも取り上げた様々な例を挙げながらミュラーは、この小説における待つことの機能はしっかりと対象を見ることであると指摘している。しかしこれまで述べてきた通り、この小説における待つことの機能は「凝視」だけで総括できるような単純なものではない。

第一に待つことはプルーストにとって想像力の飛翔する場であった。主人公は実際に北イタリアへ旅行できなくても、町の名前を喚起するだけで想像力の世界でそうした町を満喫していた。待ち伏せは成功しなくても、待っているだけでスワン夫人、ゲルマント公爵夫人への恋は達成されていた。ドゥルーズは話者を、知覚も感覚も持たず、ただ網の振動だけに反応する蜘蛛に例えているが¹⁴⁾、確かに話者は獲物を待つことを本能とする蜘蛛に近い。しかしそれはドゥルーズのいうような知覚も感覚も持たない蜘蛛ではなく、待つことに充足した蜘蛛であった。

第二に、そしてこちらの方がプルースト的といえるが、待つことは変容の場であった。ただしこの場合待っている対象は欲望の対象外の何かであり、その状態のとき現実に変容する。それまでの人間関係、ある人物の外見と内面、現在と過去、それらが一瞬にして覆り、現実とは新たな相貌を見せる。そしてそれによって主人公は現実の真の姿を学んでゆく。これはプルーストの小説作法上の方法論であると同時に、現実に対する彼の認識論の結果でもあった。

以上の通り、『失われた時を求めて』において待つことは、小説自体にとっても作家本人にとっても必要かつ逃れることのできない要素であったと言える。

注

- 1) マーティン・エスリン『不条理の演劇』(小田島雄志訳)、晶文社、1971、p.38
- 2) 底本には、*A la recherche du temps perdu*, tomes I-IV, Pléiade, 1987-1989を使用。
- 3) Marcel Proust; *Jean Santeuil*, Pléiade, 1971, pp.223-224
- 4) Ibid., pp.370-376
- 5) Ibid., pp.619-659
- 6) Margaret Mein; *Proust et la chose envolée*, Nizet, 1986, p.20
- 7) Michel Raimond; *Le signe des temps, tome 1*, CDU et SEDES réunis, 1976, p.65
- 8) Gaëtan Picon; *Lecture de Proust*, Gallimard, 1968, pp.41-42
- 9) Jean Rousset; *Leurs yeux se rencontrèrent*, José Corti, 1981, pp.122-123
- 10) *Jean Santeuil*, op. cit., p.186
- 11) マリ・ミゲ=オラニエは次のように述べている。「プルーストの場所のシステムではしばしば関係が覆るときがある。その場所とは、主人公が待機する控え室、劇場のギャラリー席、それに書斎で、それらは神聖な場所として現れる。」(Marie Mignet-Ollagnier; *La mythologie de Marcel Proust*, LES BELLES LETTRES, 1982, p.334)
- 12) Gilles Deleuze; *Proust et les signes*, PUF, 1979, p.25
- 13) Marcel Muller; *Les voix narratives dans La Recherche du temps perdu*, Droz, 1965, pp.100-104

14) *Cahiers Marcel Proust* 7, 1975, p.89

RESUME

Comme l' "ambition" de Julien Sorel ou Rastignac l' était pour le dix-neuvième siècle, l' "attente" dans *A la recherche du temps perdu*, est également un sujet pour la littérature moderne. Dans ce roman, Marcel Proust exploite souvent la période d'attente surtout pour relater d'importants épisodes. Le but de cet article est de déterminer le pourquoi de l'usage de cet acte littéraire.

D'abord l'attente constitue un champ magnétique pour l'imagination proustienne. Il est vrai que le héros de ce roman guette des femmes: une paysanne au bois de Rousaintville, Madame Swann au bois de Boulogne et la duchesse de Guermantes dans la rue de Paris. Mais le vrai plaisir ne réside pas dans le contact réel avec elles, il réside surtout dans l'exaltation que connaît son imagination pendant l'attente. Car même si, par exemple, le rendez-vous avec Madame de Stermaria est annulé, ceci n'empêche pas le héros de passer une soirée hautement sensuelle avec cette dernière, dans l'attente d'un futur rendez-vous.

L'attente est également une occasion de changement. En effet, quand le héros attend quelque chose, souvent un incident imprévu a lieu, entraînant avec lui un changement dans la situation du héros. Les rencontres avec Gilberte dans le parc des Champs-Élysées, et avec les filles à la plage de Balbec, la révélation du secret de Charlus, la découverte du "machivélisme" de Saint-Loup, et la divulgation de la maladie de la grand-mère, ainsi que deux scènes de réminiscence en sont des exemples d'incident. Ceci correspondrait à un problème lié à la méthode de narration et aux idées philosophiques de Proust, au centre desquelles le hasard occupe une importante place.

Ainsi l'attente constitue un élément indispensable pour la compréhension de la méthode de narration ainsi que le patrimoine philosophique proustien que renferme *A la recherche du temps perdu*.

